

『行く秋』に 青春の 日々を

与謝野 鉄幹

明治二十二年、鉄幹は実兄赤松照憧を頼って徳山に来ました。

鉄幹は、兄夫婦が経営する私立徳山女学校の教師（国語・漢文）として、十七歳から二十歳までの三年間、青春華やかな一時期を過ごしました。

東京に帰った鉄幹は、明治三十一年父礼蔵が徳願寺で死去したとき、再び来徳し喪主を務めました。

女学校卒業生の浅田サタとはこのころ結ばれ、やがてサタは女兒ふき子を産みますが、わずか四十三日の短い命でした。運わるくその年の秋には、浅田サタとの仲も終りを迎えてしまいます。



明治二十五年、私立徳山女学校
第一回卒業記念写真で、前列右端
が浅田サタ、中段右端が鉄幹、後
列右が赤松照憧



徳山時代の鉄幹関係出版物

下の『行く秋』は、
明治三十一年十月八
日から三回にわけ誌
売新聞に発表された
草稿で、我が子「ふ
き子」への思いが語
られており、後に歌
集『鉄幹子』にも収
録されました。

